

一週間のケンブリヂ大學

寄宿舎生活

理學博士 長岡 半太郎

長岡博士は、昨1925年、國際學術會議(International Research Council)に列するた
め渡歐せられ、自國ブリュセル及び英國ケンブリヂに數週間を過された。此の中
の、ケンブリヂの會合は、本誌にも屢々記した如く、國際天文同盟(International
Astronomical Union)の第三回の總會であつて、我が日本からは、長岡教授のほか
に、平山、松隈兩教授も出席せられた。こゝに載せる文は、長岡教授が主として
ケンブリヂの會の一週間大學の寄宿舎に起居して、全世界の天文學者たちと朝夕
を共にせられた日の土産話である。中に出て来る人物は、殆んどすべて現代の天
文學界に活躍する人々であつて、吾々、天文を知る者には實に盡きざる興味と親
しみさを覚える。(山本)

(1)

昨年七月ブルツセルで開かるゝ萬國學術研
究會議に出席せよとの命令を受け、五月三十
一日に横濱を發し、米國を経て六月二十六日
パリに入り、一週間滞在の後ブルツセルに行
き、會議に參列した。各種の科學を代表した
學者達が八十名許りも列席して、大分賑かな
會合ではあつたが、何となく大學教授會に似
て議論もやゝ居れて類似してゐた。只學生の
動作に關する話が全く抜きにせられた氣持ち
がした。

(2)

この會議は大戰の際敵國を屈服せしむる爲
に設けられたのであつて、名は國際とか萬國
とか申す形容詞を冠せられても、實は中歐諸
國を除外した會合である。然るに平和が締結
されてより既に七年を経過してゐるから、國
境無き學問の進歩を圖るには、ドイツその他
の諸國を加入せしむるが至當であるを、たれ
も感じさふものであるが、ベルギー、フラ
ンスの如き最も敵彈に浴びし國の學者は、會
議の目的に背くを固く執つて動かす蠻的な戰
争を挑發した國の學者は仲間入りせしむる
こと全然不可なりと痛切に論議し、遂に復有
名無實の萬國會議として、依前舊規に遵ふこ
事になつた。つまりかくの如き議論を吐く學
者の論據には感情と申す人心を支配するもの
が腦裡にわだかまつてゐることは明白である
誠に余の如きものが學問に國境無しの説を爲
せばそれは、ドイツの四十サンチ爆彈の辛味
を知らないからださあざける口舌によつて明

瞭である。果してその厄に逢はなかつたオ
ランダ、スウェーデン、デンマーク、アメリカ等の
學者は、中歐諸國の加入を望みしに鑑がみて
判る次第である。余は感情に走るは學者の持
ち前三杯酔の酔つげいのと同様だと思ひ、ベ
ルギーの都を去つてケムブリッヂに向つた。

(3)

同じ研究會議の一部に屬する萬國天文學會
が、七月十四日からケムブリヂで開かれる豫
定であつた。ロンドンを経て之に列席すること
とした、之に就て前觸れがあつた、ケムブ
リヂは大學町であるから宿屋が少い、それ故
大學の寄宿舎に會期間寝宿りをしてはどうか
との意味である。是は丁度余の意に適つた譯
で、ブルツセルから電報で寄宿舎の一室を借
り度いさ申込んだ。ロンドンから麥の穂の黄
ばみたる畑や、牧場で暑さを凌ぐため牛馬が
小川の傍のやう柳の影に憩へる、單調な景色
を眺めつゝ二時間計りでケムブリヂに着い
た。直に會議の事務所に就て寄宿舎の何校所
屬のものなるかを尋ねれば、セントジョンス
カレッジ(St. John's College)のH號と定めてあ
ることを知らせてくれた。

(4)

こゝは恩師菊池大麓先生が學ばれた大學で
あれば縁故も深し、學生の生活狀態は話に聞
いてゐるが實際に就て見るも一興だと思ひ、
自働車を驅つてセント・ジョンスの門に着い
た。門は中世紀の歴史に示さるゝ高い塔が屹
立して、その中間を廊下で連られ、その下
を通行口にしてゐる。夜は大なるドアを閉ざ

し、右側に門番を呼び起すベルの取手が設けてある。塔の兩側には二階造りの煉瓦屋がある。門番はシルク・ハットに黒装束で通行人を監視してゐる。自動車のを止めて荷物を下さんとすると、イヤ久し振りですねーと言ひつゝ握手を求める人がある。麥わら帽子のさび色になつたのを冠り汚れエリミシャツを着けて、さも辻こじきの様である。はてさて是は何人ぞと驚いてゐる内に、「君は忘れたか僕はキヤムベルだよ」と笑ひながら自ら名乗られたので初めて氣が付き、あの國立物理研究所のキヤムベル君ですかと問へば「さうだよ、今は隠退してケムブリッヂに自分の小研究所を作るつもりだ、君の來ることは知つてゐたが、然し門前で邂逅するのは物怪な幸、さきに寄宿舎は何號だ」と問はれて、事務所でもらつた札を示せば、「僕が案内してやる」と、中庭を左に行き、二階下の一角H號に入つた。

(5)

薄暗い二十疊敷位の部屋の中央にテーブルがあり、その四邊にイスがある、側にはソファが備へられて、二つの窓の下には各卓があつて文房具が整つてゐる。一方の壁にはストーブがあり、他方には書棚があつた、書籍は文學的經濟的のものが見えたが、その所有主たる學生は歸省してゐた。その側に戸がある開ければベッドがある、洗面器がある。タンスがある、ラケットが二つ三つ懸けてあるその下にスポーツに用ゐる諸種の靴が列を爲してゐる。向ふ側の戸を開ければ小臺所があり、ガス爐のみか、銀製のサジ、フォーク茶わん、皿杯皆備つてゐて小さな家庭のやうに思はれた。暫くすると古風な廣いボンネットを冠り、靴までおぼれた長スカートをばいた老女が來て、部屋を見まはつて出て往つた。

余は思はず、「あの女は何者だ」とキヤムベル君に問へば「あれは世話やき婆あさんだ、一日に四度位來るから、何か用があれば彼に頼み給へ」と言ふ。そこで合點したが、余が四十年前帝大の寄宿舎に居た時の事を思ひだせば、東西雲泥の差があつて何だか迷宮に入つた心地がして判らぬことばかり、旅の恥はかき捨てて昔から言ふけれども、まづいとをにして、隣近所の熟生に覺られ、日本人があんなくしてゐたこと、笑ひ話の種を作つては困ると思ひ、キヤムベル君に萬事聞きたゞして置いたから、大失敗は無かつたつもりだが、

外國の風俗異つた所では、失敗で無いと思つても、時には失敗であるから、斷言はできない
(6)

やがて赤帽ならぬシルク、ハットは荷物を部屋に運んでくれる。話も大分進行して落ち付いた心持ちがするさ、キヤムベル君は、「ノット先生が亡くなつて氣の毒だつたよ、君も日本でノット先生に教はつたさうだねー、好々爺だつたが、遂に世を去られた悼むべしである」と言はれて、涙の落つるのを知らなかつた。世界は廣くて狭いさは知つてゐるが、キヤムベル君がアイルランド生れであるに係はず余と同じくノット先生に就て學んだことも珍らしき因縁である。

部屋の窓から中庭の向ふに古色滄然として高くそびゆるチャペルの塔を眺めながら寄宿舎の事をキヤムベル君と問答し、迷宮の勝手があらまじ判るさ、キヤムベル君は是から校内を案内しようさ、中庭を横ぎり食堂に導いた古きゴシック建ての高い天井の下に食卓が陳列されてある。その上壇には又食卓がある。こゝが教授のテーブルださ教へられた。

學生の食堂の壁に、油繪が澤山懸けてある是等はセント、ジョンスを出た有名な人の像で學生の模範となるべき歴々である。湖上詩人の一人であるウォーズワースの兩側に天文學者ジョンハーシェルと海王星の發見を以て有名なアダムスの青年時代の像がある數學者シルヴェスターの肖像が向ふ壁にかけられてある。博言學者バーマーがアラビヤ服を着て之と相對してゐる。その他著名な人の像が二十ばかり列を爲してゐる。そこで余は不審を起したのは、セント、ジョンス、カレザで永く教鞭を執つてゐて、良教科書を編纂したので、「日本でも余等はその恩恵に浴してゐたトドベンタ先生の像は何處にありますか」と問へば「あの人はもう亡くなつた、ガリナリチーの少かつた人だから、その名も既に亡びたこゝにかけらるゝ名譽を荷はれないことは當然だよ」と言はれて、ケムブリッヂ大學の數學試験に難解の問題を出し短時間に解答を求めて隨分學生を惱まし、すこぶる弊害を残した習慣も今は既に下火となつて獨創的研究に重きを置くやうになつた事實が判明した、實に賀すべきことである。

(7)

食堂から奥庭に向ひ二階に上れば談話室がある、化學者リヴェングの肖像が懸けてあ

る。いすテーブル、贅澤なものが集めてある。是から先きは圖書室で、本棚が列を爲してゐる。右に折るれば寄宿舎がある。庭を圍んで皆寮であるその一角には現今ケンブリヂ大學物理學の重鎮であるサー・ジョセフ・ラモアが二室を占めてゐる。前に記したトドハンターは圖書室に隣接する室に住んでゐたさうである。その後隣に寄宿してゐたエダンバラ天文臺長サムソンを訪問したとき「長岡君、君はトドハンターの教科書を讀んだことは無いか」と問はれた。「いやその先生の跡は如何になつたか知り度いのです、教科書の恩恵には浴しましたが、又難解の問題に頭痛を催した事も數知れませぬ」さう答へたところが、この戸の上に學生の名が書いてある。その下にもこゝとしてアイザック・トドハンターの字が見える「こゝに居たのだよ、今や教科書も新まりこの名も次回の塗り替へに、憐れ一抔のペンキの下に葬られんさしてゐる悼ましいこゝだ。教科書で名を残すやうな淺い了簡では駄目だよ、之に引き代へアダムスの功績は赫々たるものだ今度大文學會に集つた世界の名士にたれ一人知らぬものばあるまいが、トドハンターを知るもの幾何ぞ」と蕪然としてあざわらつたのは面白い。

(8)

キヤムベル君に導かれて奥庭を出れば柳陰深くさいさいたる草叢の間を流る、カム川に架した橋を見た。この橋は歎息橋といつてこゝの名所であるを申した。そこで余は不審に堪えず「この閑雅な境に歎息する厭世者を出すは、恐らく試験に落第した學生が橋上から川の流れを見て卒業するものなうらやみ、逝くものはかくの如しと歎息する意味か」と、キヤムベル君に問へば、「それは思ひも寄らね考へだ、ヴェニスのリアルトにある橋をモデルにしてこしらへた橋で、名まで同じぢやないか」と言はれて、自分の揣摩した事が丸切りうそであつたことを聴きた。

(9)

セント、ジョンズ、カレダの裏門を出て、これの老樹の並木の間を歩み、隣のトリニチー、カレダに入つた。こゝに長い廊下がある、ニュトンが嘗て音の速度を測定するに利用したさうである。その他ニュトンの古跡は澤山ある。その住んでゐた部屋も現存してゐる、ニュトンは數學物理學等においては漢學における孔夫子に均しき人であるが、數學や物理

學に在つては、前に古人無く後に來者無しであるけれども、すこぶる常識の缺けた人であつた、トリニチー校に住居してゐるさき猫を飼つてゐた、その猫が子を生んだ、親猫の出入りする穴は穿けてあつたが、子猫が生れたからして、傍に又小さな穴を穿けたさうである。幾何學の大家の常識は是で判斷される其の他しくじり話は多くあるけれども、餘り馬鹿けてゐて記すも如何はしい。

現今は前世紀から今世紀の初めに雷名をさへした物理學者サー・ジョセフ・タムソンが住んでゐる。先生の額は學生の食堂に懸けてある。多數の名士の内に獨り緋の衣を着てゐるのが何だか變であつたから、キヤムベル君に問へば、是は近年授與せらるゝ學位服だ、君も數日以内に着なければなるまいよといふ、妙な事をぬかすなと思つたけれども笑談だと思ひ氣に止めたかつた。

(10)

かく巡回してゐる内に、既に正午過ぎになつたから、大急ぎでロード、ケルダホンの學んだヒーターハウスに行つた。如何にも貧弱な建物で、チャメルも名かばりである然し面白いことには電燈の發明あつて間もなく、ケルダホンの寄附した設備を見た。なる程今から見ると舊式で、スウキツチなどの奇怪なること歴史的に攻究すれば興味多大である。そこで何故に此の校だけかく貧弱なかなキヤムベル君に問ふた處が、この校はスコットランド生れの人が來るところで、純いギリス人と別になつてゐる。こゝにマクスウェルやテイもゐたさうである、同じブリチツシュであつても、その間に幾らかの閥があつて、ケルダホンの理由でこゝに寄宿したさうである。唯マクスウェルはその後何かの事情で、トリニチーに移つたさうだが、ニュトン後の大學者としてトリニチーでは誇りとしてゐる。是でケルダホンのケンブリッヂに教授ならざりし事も推量できる。又マクスウェルがトリニチーに居なかつたならば、恐らくカヴェンディッシュ實驗場の建設に興りなかつたらうと察せらるる。同國人でもこんな懸隔があるところを見れば、異國人に對して如何であらう、況んや東洋人においてをやと言はざるを得ない。印度から來た留學生が、排英熱に浮かざるゝも想ひ當ることがむづかしい。

(11)

キヤムベル君に再會を約してセント、ジョンス校に歸り、直に食堂に入れば、七八人上壇の教授席に控へてゐる。セーマン效果の發見を以て世界に名を知られたるセーマン教授は、十五年振りで逢つた。ごま鹽の髪も全く白くなつて、最早老境に入らんとしてゐるが、相變らず談笑して厭味の無い顔付をしてゐる。眼光人を射つて際の無い風彩を示してゐるフエリエ將軍は、大戰に無線電信に關する應用改善を以て斯界の巨頭として知られてゐるが、近頃感光電池の利用を思ひ付き其の效能を吹聴してゐる。天文學の大問題である三體運動の攻究を機械的に終了したストームゲレンは軌道の複雑な狀況を話してゐる。ヘルツスブルグは南亞に旅行して變光星の觀測を爲した經驗談を試みてゐるサムソンは時辰儀と無線電信で經度を測定する方法を論ずる。ダンゲルは余ミズベクトル研究の方法結果等を談じてゐたが、卓の一方に席を占めてゐるラーモア教授の談話に會衆の注意は拂はれた。「エーテルと物質」と題する教授の著書は物理學者が獨創的著述として、今世紀の始めに持てはやされたものである。門番の話によれば四十餘年寄宿舎に寄寓して、生涯をこの校で過ごすつもりであらう、今日では全く校の活歴史であるとのことである。教授に疊かけた質問は四壁にかけた名士その他の肖像の由來である。最も珍らしきは、正面に在る婦人の像である。中世紀を距ること遠からざる裝束で、學校には縁もゆかりも無さうな風勢を示してゐる、然し是はヘンリー七世の母マーガレットで、本校の創立者であつた1511年礎石を置き、その後修理増築を爲して幾分變つたさうである。仰いでゴシックの高天井を見れば、くすぶつた上が黒く光つて古き百姓家のすゝ竹も及ばぬ程である。入口の階段は磨り減らされて、古ま石の形になつてゐる。その四百餘年を経過したことは建築の何かにつきて容易にうかゞはれる。

(12)

話しつゝ食ひつゝ話す内、關東大地震の弔慰の言葉に大分興を催うしたが、かゝる名士と相並んで食事するは、學究者の爲には實に愉快に感じた。そののみか食器は古雅な銀製のものが多く用ゐられ、料理も一等ホテルのそれと凌ぐかと思はれた。晚餐には學生も多人數見えたが、すこぶる贅澤な料理を食ひ良い食器を用ゐてゐる、終れば長老の一人ラデ

ン語で祈禱を爲し、了つて談話室に入り、和氣霽々たる間に意見を交換し、あるひは氣焰を吐き、煙草の煙が室に滿つる頃散會するを常とした。

(13)

七月十四日午後三時天文學會の開會式を行ふ豫定であつた、式場は時間前に會衆を以て満たされた、第一に登壇したのは大學總長バルフォア卿であつた、通常服の上に緋の衣を着けた様子は、あだかも僧正でもあるかと思はれた。氏は世界に名を知られた政治家であるが、落ち付きはらつて、天文學におけるラヂエーションの研究の必要を説き、懸河の辯をふるつた。専門家にあらざる人がほとんど専門家を凌ぐ議論を吐き、一々急所をさへて微細な點まで説破したのに、會員は耳を傾け皆大英國の政治家が科學の蘊奥なきはめてゐるに驚いた。次にアストロノマー・ローヤルなるダイソンと學士院幹事であるジョーンズが歡迎の辭を述べた。

(14)

式後會衆はダウニング、カレンダーの庭園に開かれた園遊會に臨んだ。ケンブリヂ大學に關係ある人々は大概來たが中にはニュートンの衣鉢を傳へたタムソンも見えた。廣い額に一度見れば忘れられないしわを寄せ大音を發して談話する狀況は、ニュートン再生と思はれた。その他各専門に屬する著名な人があつたが、獨り緋の衣を着て幹旋したのは副總長セワードであることを知つた。この會は各國から集まつた科學者の親睦を圖る爲になされたのであつたが、學者が寄るゝ兎角議論に花がさき易く、余も思はず其の渦中に入つた。同位元素の研究を以て有名なるアストンと、水銀を變じ金と爲すことに付き、意見の相違があつて大分長々論辯を重ねた。その時よく驚いたことは、この研究者が力學の素養すこぶる不完全で、數學的問題に立ち入るゝ一向判らぬ顔をする、餘り不審で、ある人に尋ねれば、アストンはケンブリッヂ大學で學ばず獨學でこゝまでこぎ付けたのであるから、他の學者と標準を異にして話をせねばならぬと注意された。この大學には何やら闇があるやうで、又大まかなところがある。これが本統の英國式であらう。

(15)

晩は諸校の校友會に招かれた、セント、ジョンス校では御客を圖書室に案内した、パーチ

メントに書いた古書や、大切なドキュメントがあつたけれども、科學一方の予の如きものには、いはゆる猫に小判で、批判することは不可能である。しかし之等の文書を讀んで見ると英語の綴り方が幾度か變遷して現今のスペルリングになつた事が窺はれる。無論時勢の推移によることであらふが、段々簡單になつてゐる、近く日本語もローマ字になるであらうと豫想すれば、ヘボン式や日本式などは同じ運命に逢ふて最終には如何なる綴り方になるであらうか豫測はできぬが、矢張り簡便を主意とすることは、國の東西を問はぬことと思はるゝ。

(16)

今度の學會に參列した人の最大の注意をひいたのは、アダムスの日記であつた、彼がセントジョンスに學生であつた頃書いたものでその内の數行に過ぎぬが、「天王星の運動に不規則な狀況があるにより、若しこの星より遠い遊星があつて、この狂ひを生ずるものとすれば、その軌道と位置質量等は幾ばくであらうか、計算して見やうと思ふ」との意味を書き記したもので、その後材料を集め推算に着手した。遂にその位置を定めて、グリーンニツチ天文臺に報告したが同時にフランスでも同様な仕事を爲したルヴェリエの通知により、ドイツの天文臺で海王星は發見された。まだ人間の見たことのない星を、計算上豫言した功績は没すべからざるもので、兩人共發見の名譽を荷つた。この由緒あるドキュメントを目前に突き出されては余の如き鈍才も又感奮せざるを得なかつた。

(17)

ある晩シドネー、サツセツクス校に招かれた。芝生の周りに數百の電燈を飾つて、夏の夜の涼しき風に吹かれ樂しかつた。それのみが諸國の樂を奏して集會を賑がした。この校は昔クロムウエルが學んだところであるからさぞ殺伐な空氣に満ちてゐるであらうと思つたが、豫想に反してゐた。クロムウエルの遺物でもあるかき尊れたが、何にも見ることを得なかつた。憶ふに此の一代の英雄は武力を以て議院を閉鎖する位の意氣があつたから、學生時代にはブルドックを追跡されたことであらう。ブルドックとは何であるか次に説明する。

(18)

晩餐後セント、ジョンズの談話室で、フェ

リエ將軍と感光電池の利用を話してゐると、容貌魁偉なる人が來て、いきなり手を握り、「君は長岡だらう。この間受取つたスペクトル線の論文はモニューメンタルだが、アメリカの新聞記者に對する君の換金の話は全く法螺だらう。許して置けないぞ。事實白狀しろ。おれはカナダのマクレナンだ」と、無遠慮に突きかゝつて來た、そこで「豫て御名前は承つてゐるから、論文の交換はやつてゐるが、御目にかゝるは初めてです。君はセントジョンスにゐたのか、それともトリニチーかタムソンの下に仕事をしたことは隠れなき事實である。ケンブリヂ大學の裏表とも話したまへ」と迫ると、この男中々剛情で、前の問から返事しろと言ふので、換金の方法を精しく説明して納得せしめた後、彼の學生生活を聞くことができた。マクレナンは遙々カナダから遊學して、タムソンに就て研究したが豪放な性質で、夜遊びが大好きであつたさうだが、學生監督、即ちブルドックの捕虜となつて歸宿した度數重なつて外出毎に、行き先きと歸宿時間とを届け出なければならぬ破目に陥つた、遂にかやうな窮屈な小天地に生活するは不可能だと思ひ、中途退學を決定したさうである。今はカナダの科學界の大立者で、研究もやり、事務も扱ふ手腕家である。この人と話せば話すほど、その快活な性質を發揮して、興味深かつた。その話にケンブリヂ大學では、學生の行動を監視するに寄宿舎内のみに限らず、町の隅すみまで詮索し殊に夜更けて巡視を放ち、學生の舉動を逐一報告せしめ、場合によりては途中之を推し、引捕へて連れ歸ることもあるさうで、ブルドックの綽名はその職掌を語つて餘りあることを感じた。その後復マクレナンに逢ひたく其の宿を探したが現今既に老ひても青年時代の小天地に安んじなかつたか會期中にケンブリヂを去つて雲隠れしてしまつた。

(19)

劍橋大學を構成してゐる二十ばかりの校舎の大概はチャペルを有つてゐる、中にも1446年に礎を置いたキングス、カレッジのチャペルが最も莊嚴で寺院式に築かれてゐる、余が寄宿してゐたセントジョンス校のチャペルは中位のものであつたが長さは百七十二フィート幅三十四フィートあつた。

學生はもと祈禱に必ず行かなければならなかつたさうだが、近年は隨意となつた。朝鮮

人のやうな白い上衣を着て出入りしてゐるのを宿舎の窓から時々うかがつてゐたから、一度内部を見たいと思つた、然し予は生來禮式には無頓着であれば、必ず失敗するからこ心配に堪えず、校僕に案内してもらつた。

(20)

入口の正面には世界大戦で戦死した本校出身者の名を石に彫刻してある。右に折るれば禮拜堂がある真正面が神壇である、その床は美麗なモザイクにできてゐる。その一段のアダムスの海王星を記念する畫がちりばめてある。兩側の窓は皆ステインド、ガラスをはめ、之を透過して来る光で禮拜堂を見れば如何にも奥ゆかしい窓の一つにセント、ジョンズ出の有名な人を記念してある。前に記した詩人ウオーズウォース、博言學者パーマー、天文學者ハーシエル、アダムス等を寄せ畫として學生の將來における事業に範を垂れてゐることは、校舎の一部として記す價值がある。

(21)

校僕を歸して禮拜堂を見廻つてゐると、夫婦連れの見物人が劍橋案内者に導かれて、來た、何のいはいもなくこの夫婦が余をさしまれくから、近寄ると、案内者に聞えぬやうに小聲で、「面白いことを話してやる」と言ふからよく聞けば「案内者はこの堂はキリストの弟子であるジョンが學問した遺跡であるを眞面目で説明したが「奇怪やないか」と笑つた。余はその時「何處の案内者もこんなうそを話す鎌倉八幡では頼朝公十三歳のときの頭骸骨と呼ぶるゝものがあるが、之さ好一對だ」と腹の中をかくしく感じた。

(22)

ある晩ラーモア、ゼーマン等に誘はれて隣校トリニチーのチャペルに住つて音楽を聴いた、トリニチーは英國著名の學者政治家文豪等を出してゐるから、チャペルの記念像などは他校の及ぶところでない。入口のホールにその最大人物と考へらるゝ人の像がある、第一に哲學者政治家であつたフランシスベーコンの大理石像がある、次はニュートン、その次はバツローである。このバツローと申す人は餘り名を知られてゐないが、ニュートンの先生として尊崇されてゐる。その名はキ尾に付して傳はるさ言ふより、寧ろき頭に付して傳はつた方である。その横に三十二フィートのオーガン、パイプが連立してゐる。入つて右側に哲

學者ヒュエルと文豪兼政治家マコーレーの像がある、之に對して詩人デニソンが大理石にきざまれてある。

(23)

そこで余が不審を喚び起したのは、マクスウエルの像の建られないことである。古今を通じて世界第一の物理學者と近頃賞賛せらるゝマクスウエルの像は何處にありますか。ラーモアに質問したところが、先生はいはく、あの人はスコットランド生れであつた、話の好く判らぬ人で劍橋で名を知つてゐるのは物理關係のものばかりだ、そんなことで何やかや六ヶ敷こがあるさ話されたが、余が前に言つた通り矢張り間があることは疑ひ無い、しかし一世紀を経過すればマクスウエルの名は必ずニュートンといづれが大なるかを問はれるやうになるから、暫く待たなければなるまい。

(24)

電磁方程式を演繹するさ力学方程式を演繹するといづれが困難なるを尋ねれば、この問題も自ら解決するわけで、その内學者が判斷を下す時節が到來するから別に急ぐ必要はない。近頃の電氣事業の發展は概してその功勞をフアラデーとマクスウエルに歸せねばならぬ、しかしてその數量的事項に對しては、全くマクスウエルの指揮の下に働いてゐるのである、殊に無線通信の如きもマクスウエルが先覺者であつたことを思へば、トリニチーに區々たる大理石像を建てて建てぬの問題は、齒牙にかくるに足らぬ、くだらぬ質問を發したと話を他に轉じた。

音楽は實に端嚴であつた、ラテン語でつた宗教的の歌に對するものであるから、自然莊嚴な音を發する。三十二呎のオーガンパイプを吹奏すれば禮拜堂のオーグの棟は動して堂も又之に共鳴するやうに覺えた。

(25)

七月十八日「二十一日午後五名の名譽學位授與を行ふから式に出頭しろ」と手紙を受取つた、何だかやぶから棒を出したやうな通知で當惑したが、前にキャムベルの笑談と思つたのが事實となつて現れたのかと察せられたカヴエンダッシュ實驗場を見物に行き、ラザフォード教授に逢ひ始めて考へた通りであることを確かめた翌日緋の衣を届てもらつた。着てみる衣のやうであるけれども胸に二條のひもが下がつて、羽織のひものやうである、結ぶのやら一向知らず、又帽子はヘンリー八

世の像に描かれてあるやうな、ピロード製の
ものである、前か後か知らぬが、金線のひも
が下つてゐる、寢室の鏡の前に立ちて思案に
くれても、解決六ヶしいので、遂に立立屋に
飛び込み着方を聞きて始めて胸のひもは結ば
ぬこと、帽子の金のひもは前に下げることを
知つた。

(26)

式日になつてラーモアは君には勝手が分る
まいから、僕が案内するこの親切なことに
甘へて、連れられてダウニング校の副總長の
午餐會に列した。セントジョンズ校から宴會
場まで十町計りの間、緋の衣を小脇にはさん
でピロードのボンネットを冠つて行つたが、
この帽子を冠るは何だかきまりが悪く、途中
女小供に笑はれはせぬかさ心配したけれども
皆慣れてゐるさ見えて、ふり返るものもな
かつたのは、何よりの幸ひであつた。會場で
衣を着て着席したが學位を受くる人の年長
者は、バリ天文臺長バヤウ(七十八歳)でリッ
ク天文臺長であるキヤムベル、ライデン天
文臺長ドジツテル、エール天文臺長シュレ
ンツァーと余とであることが判つた、皆天文
學者であつて、余獨り異分子であつたけれ
ども、副總長が渡した引導で、趣旨は明白にな
つた。つまり各自の研究の主なるものを擧げ
て授與の理由と爲したのである。

(27)

會食後故道をたどりて、トリニチー校側の
議事堂に出た。その間緋の衣を着て往來を歩
んだが夏の日の熱さに汗は流るゝ、前にボン
ネット丈けでは振り向かなかつた子供等も、
緋の衣をびらつかせてゐるさ、妙な顔をする。
更に流汗を催した。議事堂裏の記録所で署名
してから、陣立てを整へた。眞つ先に立つの
はやり持ちであつた、穗さきの下に、まさ
かりが付いてゐる。やり持ちの装束は、十四
五世紀頃流行の服をそつくりそのまゝで、ボ
ンネット式の帽を冠りッポンはまたでふくれ
て、膝から下は脚半様のものを着けてゐた。
この如き服装はたゞに劇場で見ることを得る
のみと思つてゐたに相違し、劍橋では今猶實
行してゐるに驚かざるを得ない。又やり持ち
の風を見れば Shakespeare (やり振り) などい
ふ姓を名乗る人あるも無理ならぬことと思は
れた。やり持ちの後に副總長校長等が、學位
を授與せらるゝ五人を導き會議室に徐々に入
り、副總長は上段に席を占めた。その後銀

飾りの大棒を杖にした、從僕らしきものが控
へてゐた、横に立てるはドクトルグローヴァー
といふ博言學者で、余が座席に就くやラテン
語で演説を始めた、それが濟むと學位を受
くるものゝ功績をラテン語で報告し、キヤ
ムベル、パイヨー等五人は、順次棒持ちに護
衛されて副總長の前に行き、默禮して握手し
簡單なる副總長のラテン語のあいさつを聞き
その後に着席した。

(28)

是にて一部の式は終つたが、その日は大學
卒業生にも學位授與式があつた。是等の卒業
生は黒い衣を着てゐた、副總長の前に行き膝
を折つて握手した。この式が濟むと會衆は拍
手して式を終へた。堂を出づれば賀詞を述べ
るもの多人数あつたが、その一人は、余に向
ひ、君はこの劍橋の儀式を指して、野蠻と言
ふだらうと問ふた。否、保守的であると答へ
た。それから皆集つて寫眞をさつて散會した
この日議事堂の棚外は、見物人を以て埋まり
盛會であつたが、先年東宮殿下が學位を受け
たまひしときも、グローヴァーがラテン語の
演説をしたと話したが、その時はさぞ人山を
築いたことであらうと推察する。

(29)

その晩トリニチー校で祝宴を開くからと案
内があつた。天文學會に列席した平山、松隈諸
氏さきに臨んだが、余は矢張り緋の衣で出た。
タムソンは校長として、上段の長いテーブル
の一角に席を占めた、不相變緋の衣を着て
ゐるが、そのイスの背部の高いのに驚いた氣
管でニウトンの肖像を見て、イスの丈高いに
が付いたが、全くそれと同じ造りであつた。名
譽學位を受けたものは、皆このテーブルを圍
んで座つた。固より三十人位すわられるテ
ーブルであるから、その間には劍橋の諸學者
がはさまれてゐた。この大廣間の眞向うには
ヘンリー八世の肖像が懸けられ、その左にニ
ウトンの立像が畫かれ、右にはレイノルズの
畫いた貴族の小兒の像があつた。ニウトンの
像をよくよく見ると、東大物理教室で年々開
くニウトン祭に掲げらるゝ肖像は、この像の
胸以上を模寫したものである。その他詩人バ
イロン、テニソン、哲學者ベーコンの像等が
ある。壁には哲學者ロウエル、小説家サツケ
レー、物理學者マクスウェル、タムソン、
天文學者エアリー、數學者ケーレー、人類學
者ゴルトン、その他著名なる人物數十名の

額が、つてゐる。是等は皆トリニチー出身で、その澤山人材を輩出したことは、この校に及ぶものはない。タムソンは天文學會員に向つて、百五十年來アストロノマー・ローヤルは、本校出身獨占だを話したが事實であらう。

(30)

祝宴が開かるゝさ、タムソンは立つてラテン語で最初祈禱を爲した、又ガレリーにゐた樂師はラテン語の歌を殆ど間斷なくうたつた、その中には十三四の子供もゐたが全く婦人無しの宴會はすこぶる奇觀であつた。食事中、アルコール分の強いビール、即ちエールのまはし飲みが始まつた。杯は銀製の大型のもので一升位の容量があつた。その周りにナプキンの鉢巻がしてある、飲んで口を付けた場所を拭いて、次へ渡す爲である。一人が飲んでゐる間にその隣の人に立つてゐる。しかしてさかづきはその人に渡さず、向ふ向ふさ渡す、この奇怪な習慣が何の爲であるか、さつぱり判らず、隣席の元國立物理實驗場長であつたケレーズブルックに尋ねて、その古式であることを知つた。

(31)

「昔しサクソン王がエールを飲んでゐるさき刺客の爲に刺されて死んだことがあるさうで以來立ち飲みをするさきは、護衛の爲め隣の人が立つて注意する習慣になつてゐる。それが今もつて消滅せぬ。例へば君の着てゐる緋衣も中世紀の僧服から來たもので、僕の着てゐる黒衣の如きは、元は長袖に一メートル位の袋が付いてゐたものだ。是はたく鉢に出てもらつたパンを容れる爲であつた、緋衣は近年出來た學位服であるから、餘程簡單になつてゐる」さ申されたが英國の保守主義は通りものである、文化の中心に此れ程まで保存せらるゝとは思ひも寄らない。然し物理學方面では新研究が續々發表せられて、最新の空氣を吸ふことが可能である。實際劍橋のカヴェンディッシュ實驗場で爲された放射能作の研究は、世界の學者に尊重せられて科學上新時期を畫盡することがある、かくの如く舊新入り混つてゐるから、古式ばかり墨守してゐるさと言ひ難い。

(32)

宴會後庭を取り圍んでゐる廊下で會衆はカフェを飲みつゝ談話を交へた。英國各地方の學者のみならず、東洋方面からまで來てゐる

から、あだかもコスモポリタンの趣味を帶びた、中にもトリニチー出身の學者が多人數あつて、しかも有名な人が澤山ゐた。ニュートン以來多士、濟々實にうらやましく思はれた。

(33)

學會で専ら數學物理天文等に關する劍橋フィロソフヒカルソサエティーといふものがある。滞在中この會が開かれたが、相變らずコスモポリタン式の會合で立錫の餘地無きまで聽衆を以て滿たされた。印度人は多數見えたが、中華民國天文學者張雲も見受けた。論文の提出されたのは十篇計りあつたが、時間が短いで講演は三人に限られた。タムソンの輻射の構造、エツゲンソンの天文學における電離の意義に關する研究が報告された、之によつて始めて相對原理と、天體力學とを總合した結果が相一致し、電離の説明を應用するに適切な面白き場合ある事を知つた。余も幸ひに短時間に水銀換金の講演を爲す光榮を荷ふた。しかし他の人の論文は、Taken as readで終結された。天文學總會の事で記すべきことは澤山あるが、餘り専門的に流るゝ弊害があるから記さぬ。

(34)

寄宿舎の内幕を記し度いが、あひにく學生と接觸する暇がなかつた。唯外部からうかがつて見たに止まる。兎も角夏休み中寄宿舎に残つて勉強してゐる連中だから、熱心家には違ひない。餘り喧騒な舉動は氣付かなかつたが殆ど各室に備へてあるピアノの音を聞くことは數々あつた、又時々スポーツに行くことも、服裝の變りやラケットなど持つて出ることににより判つた。又禮拜堂に日參する學生も少くは無かつた。要するに劍橋大學では人物養生を目的としてゐるから學問一方のみに偏する傾向は少いやうである。

(35)

寢室に入りて電燈を消せば、ステインド、ガラスの窓からもうろうと薄い光がもれて、氣味悪い心地が最初はしたが數日を経れば之に慣れて心地よくなつた、隣のトリニチー校のチャペルの塔の時の鐘に夢を覺されて感慨深き想をしたことも度々あつたが、一週日は束の間と思ふ内に過ぎ去りて、七月二十二日には此の興味ある大學町を去つた。(終)

〔東京帝國大學新聞より〕